

海外の話題

大人の国

農林中央金庫 前ロンドン支店長 中山 昌 生 (現 資金為替部長)

先日ロンドン郊外の日系ゴルフ場Bへ出かけたところ、ドライバーレンジ（練習場）がクローズしている。なんでもここのところの多雨で近くを流れる川が増水して危険な状態となり、当局が堰を開いて水を逃がした結果、練習場が水没したのだという。都心から車で30分足らずの場所でそんなことが起こるのもこの国ならではと思うのだが、面白かったのはそこから。支配人氏がこぼして言うには、「これは損害賠償ものだと勢い込んで当局へ抗議したところ、『コースが水に浸かって営業できないわけでもないのにうるさく言うな』と、全くとりつくしまもない対応。そこで従業員に当り散らしたのだけど、皆『やむを得ない事で、こんなことでうるさく言うのは大人気ない』と冷ややかな反応で、苛立っている私のほうが浮いてしまった」のだという。

細かなことにとらわれない大らかな国民性なのだととらえることはできるだろうが、フェアであることを大切な社会規範にしている英国人は、事の次第によっては相当瑣末と思えることにもこだわりを見せる。私はこの話を、社会的な利益と個人の利害の調整の最前線でおこる象徴的な出来事として聞いた。堰を開いて水を逃がすことが社会としてやむを得ないことならば、そのために自分が不利益をこうむったとしても、それが相応に大きなものでもない限りそれを居丈高に主張することを好ましくないとする一種のセンスが、この国の人々にあるのではないかと思われる。それぞれが自分勝手なことを言っていたら埒があかない、調整コストはかさばる一方だと。

もうひとつ、これは以前にも紹介した話で恐縮だが、某日系企業がロンドンに自社ビルを建てることになり、建築許可を取るため設計図を当局に提出したところ、担当官が「この通りの建物は表面がレンガでなければ許可できない」という。確かに両隣はレンガ造りの建物なのだが、その先には石造りのビルもあるのだが、レンガでなければダメなのだ。仕方なく当初の立派な石造りをレンガに変えて再提出したところ、今度は「この設計だと通りが暗くなるからもっとセットバックしなければ許可できない」という。当然法令に適合して設計はなされているのだが。

「決めることができる一人を決めるのが民主主義」という話が思い起こされるが、このようにある職責に相当の裁量権限を与えるのが英国流らしい。許可申請するほうは担当官の気分次第（？）で許可されるかどうかわからないのだからたまったものではないが、一方で一般性が求められる法令で個別の事情を背負っている現実を御しきれないのは当然で、結局裁判官が法解釈を通じて現実妥当性を追及しなければならぬのならば、最初から担当官に権限を与えて現実的対応を図るほうが理にかなっているとも思えてくる。

日本の土地利用の混乱や用地確保に手間取り遅々として進まない公共事業を見ていると、もう少し全体利益を優先させる発想が必要と思われる。もちろん今の日本でそのまま役人に強制権限を与えればよいなどと考えているわけではない。まず必要なのは大人の対応の下地となる行政と国民の相互信頼であろうか。